

タブローと静物

持ち運び可能な絵画（タブロー）は、教会といった特定の場・建築に描かれる壁画のように、不特定多数からの鑑賞を前提とした作品とは異なり、ときに親しい人たちの間で楽しむために私的な情景が画題として描かれた側面があります。

その中でも静物画というジャンルは、画題として食器や食材、花、日用品など、しばしば身近にある品々が選ばれ、近現代においては、とりわけプライベートな性質を強く示します。小林徳三郎による《瓢箪》は、壁際に置かれた絵画の額によって、画家自身のアトリエという私的な空間にて描かれたことが推測できます。

なお、19世紀に至るまで、宗教画や歴史画などの人物表現を中心とした分野に比べて静物画は低く見られていた歴史があります。しかし、（人物を介さないが故に）より自由にモチーフの位置・光の位置が調整できるという点で、画家にとって実験的な絵画制作の場となっていました。エーリッヒ・ヘッケルが描いた《木彫りのある静物》において見られる木彫の女性像は、絵画作品と同年の1913年にヘッケル自身が制作したのですが、ヘッケルは少なくとも1950年頃まで数回、同じ木彫像を静物画の中に描いています。そこには、モチーフに対するヘッケルの愛情や親密さと共に、表現方法の試行錯誤を見ることができそうです。

また、画家によるモチーフの捉え方の違いも確認することができます。例えば、《静物》を描いたアレクサンダー・カーノルトは俯瞰的に、冷静に対象を見つめているように見えますが、ヘッケルは、（まるで大人が子どもに視点を合わせるかのように）ほぼ真正面に見据えています。静物画というジャンルは、画家がどのように対象を見ていたか、鑑賞者に静かに語りかけてくるのです。

静物とテーブル

他方、静物画の多くがタブロー（Tableau）と語源を同じくするテーブル（Table）の上に描かれていますが、このことは偶然では無いかもかもしれません。そもそもテーブルという単語は、タイムテーブル（時刻表）という言葉に見られるように、「一覧表」「索引」といった意味を備えています。少し意味を拡張すれば、静物とはテーブル上のモチーフによって、その空間に住まう人たちの性質を示すものと言えるかもしれません。

例えば、静物画ではありませんが南薫造の《坐せる女》には、女性像の右側に慎ましやかな花の姿が見られます。こうした卓上の静物表現は、女性そのものの慎ましやかな性質とも呼応しているようです。また、ジョージ・グロスの《群盗》においても、テーブルに置かれた金や酒類は、そのテーブルの使用者の性格そのものを指し示しているかに見えます。もっとも、美しき花とは対照的な姿かも知れませんが。



絵画は言葉を持ちません。しかし、それでもなお雄弁に語りかけてくる何かが、静物画には描かれているのではないのでしょうか。

当館学芸員 山下寿水

アレクサンダー・カーノルト
《静物》1925年

工芸の多彩な魅力を比べて見る

「工芸とは何か」という問いは、明治維新後、西洋近代の美術概念が移入され、美術と工芸が区別されて以来、工芸作家を悩ませてきました。そもそも、日本では近代化以前には美術も工芸も区別なく、絵画から衣類・茶器に至るまで、生活の中で美を享受し、それらは精神の表出の場でもあったのですから。

近代化以後、工芸は美術より下位に位置づけられ、明治40年に開設された官展からも除外され、工芸の官展への参加は昭和2年を待たなければなりません。工芸家たちは美術に劣らぬ工芸の質及び地位の取得と社会的認知に尽力しましたが、そこで形成されてきた工芸の一般的定義は「用+美」というものでした。美術とは純粋に人間精神の表出であるのに対し、工芸は実用性と美しさを兼ね備えた造形物とでも言いましょうか。

工芸の近現代史は「用」と「美」の間を振れてきた歴史と言うこともできます。その過程で、伝統を尊崇するとともに反発し、変革と自己表現への強い欲求から「用」を捨てて純粋美術の領域に分け入り、そこでまた、工芸・工芸作家とは何かというアイデンティティーに苦しみ…。このような相克を繰り返すことによって、日本の工芸は磨かれ、より多彩に魅力を増してきたとも言えます。

さてここで、工芸は「素材に立脚して、これを様々な技法・工程により加工・造形して生み出す美術作品」と、とりあえず定義してみましょう。素材のバリエーションに技法のバリエーションが乗じられ、さらに、制作の背景には時代・地域・価値観・美意識などの違いがあり、工芸作品の表現は極めて多彩、かつ工芸にしかない特有の表現力があります。

第四展示室では、当館が誇るアジアの工芸作品を交え、工芸作品の多彩な魅力を9つの視点で「比べて見る」ことにより味わってみたいと思います。

当館主任学芸員 宮本 真希子



板谷波山
《青磁鳳耳花瓶》



鯉江良二《VESSEL》
2006（平成16）年